



## 絵本作家の 書齋⑨

いつも6:11~

書齋訪問の数日前のこと、西内ミナミさんから電子メールが届いた。開けてみると「訪問メモ」とある。当日順調に話が進むようにと、仕事場のこと、両親のことなどを事前に書いて送ってくれたのだ。驚きつつ、感謝のメールを送ると、さらに返事が。それもこちらの数倍の長さである。「申し訳ないです」と電話で伝えると、「いいのいいの。いつものことだから」と明るい声だ。いつものこと？



当日の昼下がり、東京都杉並区にある西内さんの仕事場へ向かった。十年ほど前に自宅近くに設けたもので、最近改装を施したばかりだという。

「ここができる前は、家事の合間に台所で書いていたのよ。」  
西内さんが、そう言いながら迎えてくれた。

# 西内ミナミさん

西内ミナミさんはロングセラーである『ぐるんぱのようちえん』をはじめ、

たくさんの絵本や童話を執筆してきました。

でも、西内さんには別の形をした「作品」もあるのだとか。

### 幼い頃の思い出

西内ミナミさんは一九三八年、京都で生まれた。父親は青森市出身で京都大学卒業後、大手の金属鉱業会社に勤めていた。大学の恩師の紹介で結婚した母は京都の生まれ育ち。長女である西内さんを実家へ出産すると、当時父親が働いていた精錬所のある瀬戸内海の直島<sup>なほしま</sup>へ向かった。

その頃の思い出は、なんとと言っても白い砂浜と穏やかな青い海だ。戦時中だったが島には空襲がなく、当時としてはのどかな環境で子ども時代を過ごした。

「児童文学には、作者が育った場所の記憶が色濃く反映されると思うの。私の作品はからっと明るいものが多いと言われるのだけれど、直島で育ったことと関係があるような気がします。」

### 作家になりたい

小学生になった頃、戦争が終わった。父が勤める会社の購買部（売店）で本が買えるようになると、アンデルセンやグリムの童話集、日本の名作童話選に夢中になった。特に心に残った童話が宮澤賢



直島の海岸で父と共に



小学校卒業時の西内さん(前列右)。たしかにひとりだけ違う服装だ。「この頃から「セーラー服が着たい」って母には言い続けてたんだけどね」



西内さんがかかわった同人誌。左が高校時代の文芸部のもの、中央と右が大学時代

治の「貝の火」と草野心平の「山猫ジブリー」だ。「どちらもお話の筋書き以上に作品世界そのものに惹かれたの。なんとも言えない空気感があるでしょう。いつか私もこんな作品を作れたら、と思います」。

「書くこと」も好きで、友人との秘密の手紙ごとに熱申した。それぞれの家の垣根の下に穴を掘ってガラス瓶を置き、そこに手紙を入れる。

「一応、代わりばんこに書く約束だったけど、私

が倍くらい書いちゃうのね。その頃から私の手紙は長かった(笑)。とにかく手紙は好きで、中学時代を除いて、手書き、FAX、メールと形式は変われど、ずっと手紙を書いていきます。なにか思いつくと、それが文章の形で頭の中に立ちのぼってくるの。それを人に伝えたくなくなってしまふ」。

なるほど、それで「いつものこと」な

のか。読むことも書くことも好きな少女は、いつか、作家になりたいと思うようになっていた。

### 中学、高校時代

一九四九年。小学五年生のときに父親の転勤で、東北地方に引越すことになった。宮城県北西部にあった細倉鉱山(ほぐら)で一年半を、その後、秋田県東北の尾去沢(おしざわ)

鉱山で中学三年生の冬まで過ごした。瀬戸内海から雪国へ。当初は方言の違いに戸惑ったが、明るい性格のせいだろうか、友達もすぐにできた。

中学時代、あまり手紙を書かなかった理由は「勉強」のためである。その学校は企業が運営にかかわっていたせいか、徹底的な能力主義がとられ、成績順にABC……とクラスが分けられていた。最初にAクラスに入ったため、なんとかここに留まりたいと必死に勉強した。

一九五三年、中学三年の冬に再び父の転勤で東京都杉並区へ移る。転校先の中学校で「高校受験の準備はしていますか」と聞かれたときは、真っ青になったが(何もしていなかったのだ)、受験の問題集を見て安心した。すでに知っていることばかりだった。

母親が近所の高校を訪ねて回った結果、自由な気風があり、制服のない都立豊多摩高校を受験、入学することになった。洋裁が得意な母は、洋服はそれぞれ個性にあったものを着るべきという考えだった。「だから私は子どもの頃から『みんなと同じような服』を着せてもらえなくてね。正直、すごいやだったのだけど、気づ



### なにか思いつくと、それが文章の形で頭の中に立ちのぼってくるの

イブもしていた。

### 児童文学の世界へ

高校時代は「書くこと」に忙しく、勉強はあまりしなかった。そのせいか、東京女子大学を受験するも、四年制の学部は不合格。辛くも短期大に滑り込んだ。

「あのときの挫折感は大さかった。入学後にたまたま話した、東京山手育

くと『自分は自分、人は人』と思うようになっていました。人と違うことで孤独を感じたりもしなかったしね」。

文学が好きで西内さんは当然のように文芸部に所属した。部で出される課題で古今東西の文学作品に触れ、個人的には日本の詩集を愛読した。心に響いたのは、やはり宮澤賢治だ。「オホーツク挽歌」や「青森挽歌」といった詩に「電撃的に打たれたわね」。

自らも詩を書き、文芸部の同人誌に掲載した。また友人たちと活発に手紙を交換し、親友のためには、あるポラ

ちのお嬢様の丁寧な言葉づかいにもカルチャーショックを受けてね。私はダメだ……とかなり落ち込んでしまったの。

そんな状態から回復させてくれたのはサークル活動だった。最初は文芸部に所属しようと思っていたが、気の合う人が多かったという理由で児童文学研究会

「いそさんちやく」に変更。子どものためのお話を書き始めることに。気づくと憂鬱は吹き飛び、「私の居場所はここだった」とさえ感じるようになった。

「後に考えたんだけど、理由は二つあると思う。一つは自分に『短い物語が向い

ている』ということ。実は、物語を思い

つくとときには、文章でなくて映像が頭の中に浮かぶの。それを何度も何度も『再生』しながら文章として完成させていく。このやり方は長編には向かないのね。

もう一つは『悪人が書けない』。大人の文学はもちろん、児童文学でもしっかりしたファンタジー、たとえば『指輪物語』(J・R・R・トールキン作、評論社文庫)や『ゲド戦記』(A・K・ルリグウィン作、岩波少年文庫)には悪の存在が不可欠よね。書いてみようとかんがいがんばったけど無理だった。

でも、幼い子どものための物語では、人生の明るい面や温かさを届けることが重要でしょう。それが人の心の根っこ



『とんがとびんがのプレゼント』スズキコージ絵「こどものとも」1968年12月号(司修絵)として刊行された作品の新版。2008年刊



『クリーナおばさんとカミナナおばさん』堀内誠一絵「こどものとも」1974年5月号



部分となって、つらいことを乗り越えていく強さとなる。私にはそういうお話作りのほうが向いているみたい。

別に自身は世の中みんなが「善人」だなんて思っていないわよ。高校時代にも、ひどく誤解されて、かげ口をたたかれたことがあってね。その頃に決めたの。「私は人の良い面だけを見て生きていく」って。

### 仲間との活動

二年生のとき、再び猛勉強をし、四年制の学部に入転する。専攻したのは経済学だった。「文学は自分で好き勝手に楽しみたい。学ぶなら別の学問をと思っただ。おかげで文学だけを学んできた人とは別の視点が得られたかな？ たとえば『クリーナおばさん』とカミナリおばさん』という絵本では今から四十年前にもゴミ処理とリサイクルの問題を取り上げた。「とんがとびんがのプレゼント」で描いたのは町工場と大企業の関係。どちらも絵本の世界ではめずらしいんじゃない？」。

サークルでは同人誌の創刊にもかかわった。仲間と一緒に活動することも、自

分の作品を生み出すのと同じくらい好きだった。当時のメンバー十数名は卒業から半世紀を経た現在も仲が良く、「バオバブ」という名の同人誌を今も毎年一回発行している。「合宿や合評会も続けているのよ。すごいでしょう」。

### コピーライターに

大学在学中、広告代理店でアルバイトをしたことがある。そのとき広告の言葉を考えるコピーライターという職業を知った。作家に憧れていたが簡単にはなれない。文章でお金が稼げるなんていいな。かくして大手代理店、博報堂の採用試験を受けることにした。

「コピーライター用の試験問題がおもしろくてね。たとえばこんな感じ。『あなたはAさんから求婚されたが、Bさんとつきあっています。Aさんの心を傷つけずに上手に断る手紙を書きなさい』。試験場で思わず『やった！』って叫びそうになっちゃった」。

なぜなら、高校時代にしていた友情からの「ボランティア」とは、「ラブレターへの返事」だったからだ。

学時代の勉強といい、高校時代の手紙といい、人生、無駄なことってないわね(笑)」。見事、採用された西内さんは、はりきって働き始める。時は東京オリピック直前、高度経済成長の真っ只中で刺激的な日々だった。

入社した年の秋に、高校時代の文芸部仲間と結婚、翌年、子どもが生まれることになった。女性は、出産したら会社を辞めるのが当たり前の時代だ。どうしよ

うと考えていたある日、たまたま手にとった業界誌にコピーライター募集の文字を見つけた。「アドセンター」という知らない会社だったが、当時住んでいた渋谷区の自宅から徒歩五分。小さい会社のようにだし、事情を話せば仕事を続けることができるかもしれない。

とりあえず訪ね、人事の担当者と面接をした後、制作物を統括するアートディレクターの前に通された。彼は西内さん

が仕事をまとめたスクラップブックを無言でめくり、最後にぼそりと一言つぶやいた。「明日から来て、コピー書けば」。その人が堀内誠一。絵本作家の顔も併せ持つ、グラフィックデザイナーだった。

### ぐるんば誕生

西内さんはすぐに博報堂に産休届を出し、翌日から通い始めた。デパートから

の仕事が入ったところで会社は大忙し。出産前日まで働いた。博報堂を辞し、産後は育児を義母に助けてもらいながら、午後のみアドセンターに出社した。

そんなある日、堀内から声がかかった。「学生時代に児童文学をやったんでしょ。『こどものとも』から、次の作品を考えてくれて言われてるんだけど、お話をやってみない？」。

「こどものとも」は福音館書店が毎月一冊発行している物語絵本で、堀内は一九五〇年代から数作を手がけていた。

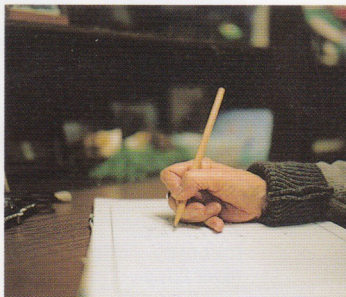
念願の子どもの本だ。西内さんはわずか一晩で物語を考えた。それが「ぐるんばのようちえん」である。ひとりぼっちで暮らす大きな象ぐるんばが働きに出るが、ビスケットもお皿も作るものが大きすぎて、ことごとく失敗。しょんぼり歩いていると子だくさんのお母さんと出会った。子どもたちは大きなビスケットやお皿に喜び、ぐるんばは幼稚園を開く。

「ぐるんば」という名前はすぐに思い浮かんだ。広告の仕事で商品のネーミングをしていたから訓練されていたのかな。象は鼻をぐるぐるっと上手に使ってリンゴをとったりするでしょう。その『ぐ

西内さんがコピーを書いた広告。  
絵は長新太



コピーライター時代。  
長男が誕生して  
「ぐるんば」を執筆した頃



文学は自分で好き勝手に楽しみたい。  
学ぶなら別の学問をと思っただ





### 薄曇りの日々

一九七〇年代初頭、二人目の子が生まれた頃にコピーライターの職を辞した。子育てが忙しくなったこと、また、当時の「母の友」を読み、合成洗剤が川を汚染していることを知ったことも理由だった。広告業界にいる限り、その環境破壊に加担してしまうと感じたのだ。

同じ時期に、杉並区に引っ越した。そして児童文学者、石井桃子が著した『子どもの図書館』（岩波新書、絶版）に触発され、自宅で「文庫活動」を始めた。地域の子どもに絵本の読み聞かせや貸し出しをする活動だ。それにとどまらず、西内さんは息子の学校のPTAの仲間と協力し、地域を巻き込んだ読書推進活動へと広げていく。

そんな折、義母がガンの告知を受けた。子育て、地域活動、さらに「看取り」。一つも手を抜かず、すべてに全力で臨んだ。一九七六年、義母が亡くなると、ついに「燃え尽きて」しまう。「鬱になっちゃったの。壁に向かって一人でぶつぶつぶやいていたらしいわ。文庫連の集まりにも出かけられなくなりました」。

なにをしても、気持ちが晴れない。創作意欲など湧くはずもなく、曇天の下を歩くような生活を送る。永遠に感じられる年月だった。そんなある日、新聞で心療内科という存在を知り、薬にもすがり、気持ちで訪ねた。「薬を処方してもらったら、みるみるよくなりました。四十歳の誕生日に、いきなりトンネルを抜けて青空が目の前に広がったような感覚があつてね。それからまたお話がじゃんじゃん書けるようになったの。あの暗い時期、私を支えてくれた家族にはただ感謝ね」。

回復後に書かれた絵本、『ゆうちゃん とめんどくさいサイ』や童話「カラスのカーター一家」のシリーズには子育ての体



『ゆうちゃん とめんどくさいサイ』  
なかのひろたか絵  
「子どものとも」  
1981年12月号  
として刊行



『カーターと五つ子たち』  
長新太絵  
1983年、小学館刊、絶版  
「カラスのカーター一家」  
シリーズには他に  
『もりはおおさわぎ』  
あかね書房刊、絶版、  
などがある

る』って音を使ったの。

後に気づいたのだけど、ぐるんばは二十六歳のときの私の自画像ね。とりあえず転職して、子どもが生まれ、人生がこれからどうなっちゃうんだろうって思っていた。お話の中だと、ぐるんばがピスケットを作っているあたりが当時の私。だからその後は願望なの。「これからなにかいいことありますように」って。近年はぐるんばが不器用なところにも共感してしまうそう。

「最近、どうも要領が悪くてね。仕事ですぐに「大きく」なるの（笑）。必要以上に手間と時間をかけちゃうのよ」。

験が直接的に反映されているそう。

「鬱でも、子育てはしなくちゃいけないからね。でも、子どものことはおもしろいなあ、と見ていたの。ただ、その頃は自分の『ありのまま』の生活を作品にする気持ちにはなれなかった」。

### もうひとつの代表作とは？

その後も「無理をしすぎないように」と気をつけてはいるが、主婦として家事をこなし、地域の読書推進活動や大学の時代の仲間との同人活動も続けてきた。あるとき、親しい友人の画家に言われ

た。あなたは作家なのだから、創作の仕事のみに集中すべきだ。

「でも、できないの。欲張りなのかな。家庭も仲間も大事にしたい。作家としては失格かもしれないけれど、そういう人間なんだから仕方ない。それに、おこがましい言い方だけど、家族のつながりも、読書推進活動や大学の同人活動が数十年続いていることも、すべて私の『作品』であり、財産という気持ちなの。無形文化財よ（笑）」。

気がつくとも、日はとっぴり暮れていた。西内さんが時計を見る。「まだ間に合うと思うから、帰り道に私の『もうひとつの代表作』を見ていって。教えてもらった、駅の近くの「地域区民センター」へ急ぎ足で向かった。ここに西内さんが文庫活動の仲間と力を合わせて作った「図書コーナー」がある。階段を上がると三万冊を超える本が待ち構えていた。「本がある居間」を目指してこの場所が開設されたのは一九八五年。絵本『ぐるんばのようちえん』と同じく、こちらの『代表作』も三十年以上にわた

り、愛され続けている。（編集部・伊藤）



家族のつながりも、読書推進活動や大学の同人活動が  
数十年続いていることも、  
すべて私の「作品」であり、財産という気持ちなの